

ミツカン水の文化センター

第24回（平成30年度）定点調査

「水にかかわる生活意識調査」結果レポート

一般生活者のSDGsへの関心度は今ひとつ？
「世界の水問題」の認知率が軒並み低い結果に

【調査期間：2018年6月7日(木)～12日(火)／対象エリア：東京圏・大阪圏・中京圏】

設立20年目を迎えたミツカン水の文化センター（東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル 株式会社 Mizkan Partners 広報部内）では、本年6月中旬に、東京圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）、大阪圏（大阪・兵庫・京都）、中京圏（愛知・三重・岐阜）の在住者1,500名を対象に、平成30年度「水にかかわる生活意識調査」を実施し、このほど集計結果をまとめました。

今回は、貧困や格差解消を目指すグローバルな取り組みとして昨今注目されている「SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）」に深く関わる「世界の水問題」をテーマに、その認知を探るための設問をはじめ、「日常の水意識」に関する新たな設問を加え、調査を実施しました。また、昨年につき、当センターのアドバイザーであり、東京大学国際高等研究所・サステイナビリティ学連携研究機構教授の沖 大幹先生に、調査結果を受けての解説をいただきました。

「水にかかわる生活意識調査」は、センター設立に先立ち、1995年に第1回目を実施して以来、ほぼ同じ内容で毎年6月に行っている定点調査で、今回が24回目となります。日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化などについてアンケート形式で調べるという手法により、生活者の実感としての水の諸相を明らかにしようというものです。[今回の調査データおよび過去（第1回～23回）の集計概要は、別途HPで紹介しています。]

《調査結果》

【1】 一般生活者のSDGsへの関心度は今ひとつ？
世界の水問題に対する低認知率が明らかに
…「水道水をそのまま飲む国はごくわずか」（67.1%）以外は、
いずれも認知率が3割未満

【2】 節水意識がますます低下
…“節水していない人”が6割に迫る過去最高値に

【3】 節水する理由は“環境配慮”より“節約”？
…全体の6割超が「水道料金節約のため」と回答
…「汚れた水を流さないため」や「環境保全のため」は
1割前後の回答率

〔解説〕 Oki's View
…沖大幹先生による解説

【この件に関するお問い合わせ先】

ミツカン水の文化センター 松本・青木

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル 株式会社Mizkan Partners 広報部内

TEL.03-3555-2607 FAX.03-3297-8578 <http://www.mizu.gr.jp>

《結果の抜粋と掲載ページ》

■ 調査概要		2ページ
■ 世界の水問題と日常における水意識		
◇ 家庭で1日に使っていると思う水の量“200リットル以下”の回答者が7割超		3ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ①		3ページ
◇ “節水していない人”が過去最高の6割近くまで増加…トピック【2】		3ページ
◇ 節水する理由は“環境配慮”より“節約”？ 6割超が「料金節約のため」…トピック【3】		4ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ②		4ページ
◇ 世界の水問題の認知「水道水をそのまま飲める国はごくわずか」は約7割も、 飲めない国の実態などその他の項目は3割満たず…トピック【1】		5ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ③		5ページ
◇ 日本で深刻だと認識している水問題「知っていることはない人が約3割		6ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ④		6ページ
◇ 環境保全のために取り組むべきだと思うこと“無駄をなくす”取り組みが上位		7ページ
■ 水道水に関する意識		
◇ 水道水の評価が、7点台を回復し7.05点に		7ページ
◇ 水道水への不満は「不満なし」の回答率が約5%減少		8ページ
■ 水と生活・文化		
◇ 水と関わりの深い日本の文化「水道インフラ」が4年連続1位に		8ページ
◇ 水や自然に関する祝日・記念日「水の日」の認知上がらず2.7%		9ページ

【調査概要】

第24回（平成30年度）「水にかかわる生活意識調査」

- ◆ 調査対象数 : 1,500票
- ◆ 調査対象者 : 東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)、大阪圏(大阪、兵庫、京都)、中京圏(愛知、三重、岐阜)に居住する20歳代から60歳代の男女
- ◆ 調査方法 : インターネット調査
- ◆ 調査期間 : 平成30年6月7日(木)～6月12日(火)
- ◆ 回収数(人) :

	東京圏		大阪圏		中京圏		合計		小計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

世界の水問題と日常における水意識

水は、健康かつ文化的な生活や経済活動など、人々が生きるための営みすべてに欠かせない資源です。そして、持続可能な社会の実現に向け、水に関する問題は避けて通ることのできない問題であるとともに、発展途上国のみならず、先進国も含めたグローバル規模で解決すべき課題と言えます。2015年9月の国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）の17の目標においても、水問題は「6.安全な水とトイレを世界中に」という単独の目標のみならず、その他すべての目標とも密接に関わる最重要事項と言っても過言ではありません。そこで今回、「世界の水問題」をテーマに、世界で起きている水問題に関する認知の度合いを調査し、その結果を通じて一般生活者のSDGsへの関心度を間接的に探りました。

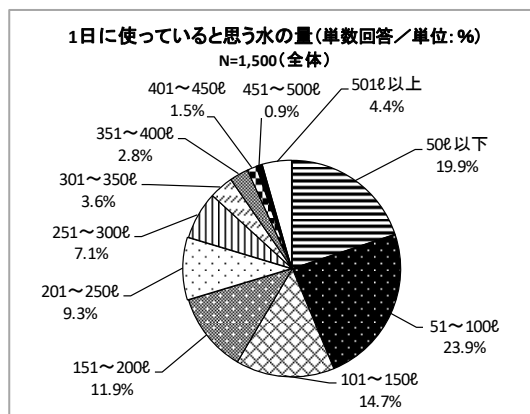
また、節水意識を探る趣旨で毎年実施している「家庭における水の使い方」の実態調査に加え、節水を意識する理由や、環境保全のために日常で取り組むべきだと思うことなども新たに調査しました。

Q.家庭で1日に使っていると思う水の量は？（11択）

◇“200リットル以下”の回答者が7割超

自分自身が家庭で1日に使っている水の量はどれくらいだと思うかを尋ねたところ、最も多かったのは「51～100リットル」（23.9%）で、「50リットル以下」（19.9%）、「101～150リットル」（14.7%）、「151～200リットル」（11.9%）と続き、これらを合計した“200リットル以下”の回答者が全体の7割を超えました（70.4%）。

ちなみに、東京都水道局によれば、家庭で一人が1日に使用する水の量は平均約220リットル（平成27年度）とされています。



沖大幹先生による解説 ～Okī's View～ ①

【家庭で1日に使っていると思う水の量】

少なすぎる。水への関心が高まらないのは、自分ではあまり水を使っていないと思っているからなのだろうか。家庭で一日に使っていると思う水の量が50L以下、という方が約2割。もちろん、洗濯(1回約70～100L)はコインランドリーで済ませ、食事(炊事に平均1日約30L)は外食、トイレ(1回約5～8L)は1日2回程度、シャワーは毎日3分(1分あたり約12L)だけ、といった生活であれば50L未満に抑えるのも可能ではある。しかし、東京都水道局によれば家庭で1人1日あたり平均約220L使っているというのに、200L以下と答えた方が全体の7割である。しかも、世帯当たりの人数が少ない方が1人あたりではむしろ多く使っていて、1人世帯では約270L/日であるのに対し、4人世帯では1人あたり約200L/日である。ごく一部の方々が極めて大量に使っている可能性は捨てきれないが、ここはやはり水で困る機会が減り、自分が毎日どのくらい水を使っているのか一切気にせず済んでいるため、聞かれてもわからないからなのではないだろうか。

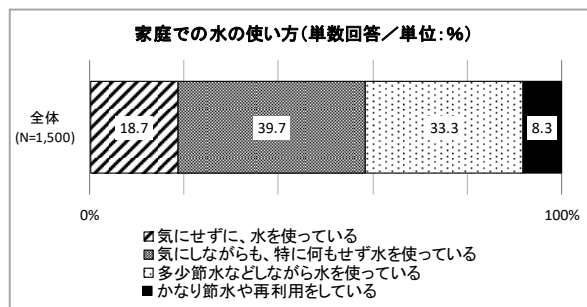
たとえ自動引き落としで水道料金を支払っているとしても、水道使用量のお知らせには目を通して、毎月(あるいは2ヶ月で)どのくらいの水を使っているのか、8月1日「水の日」を機会にぜひご確認ください。

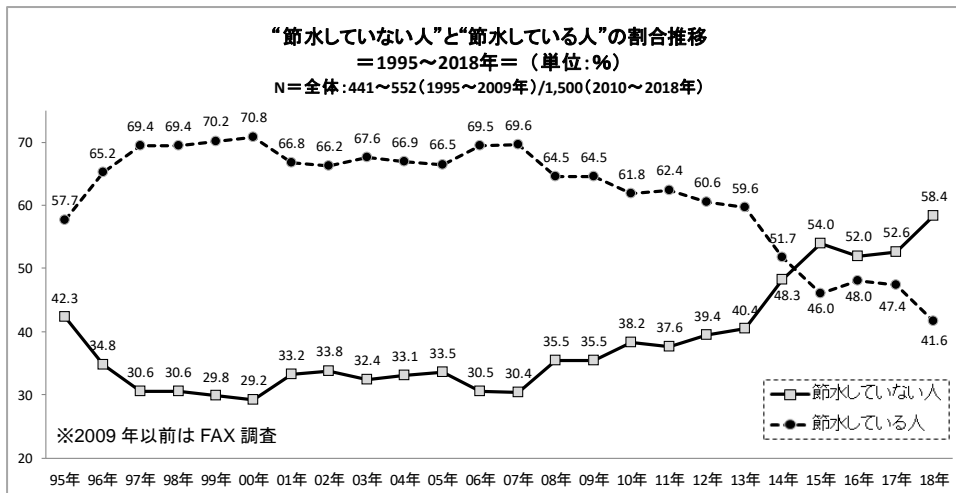
なお、501L以上と答えになった方も少数(4.4%)ながらいらっしゃる。庭の水撒きやプール付きの豪邸なら十分にあり得る量である。

Q.水の使い方は？（4択）

◇“節水していない人”が過去最高の6割近くまで増加

家庭における水の使い方は、2015年に「節水していない人」の割合が5割を超え「節水している人」を上回ってからは、ほぼ横ばいが続いていましたが、今年は「節水・再利用のことは気にせず水を使っている」（18.7%）が昨年から4.0ポイント、「節水・再利用は気にしながらも、特に何もせず水を使っている」（39.7%）が昨年から1.8ポイントそれぞれ増加。この両者を合計した“節水していない人”は58.4%で、6割に迫る過去最高値となりました。





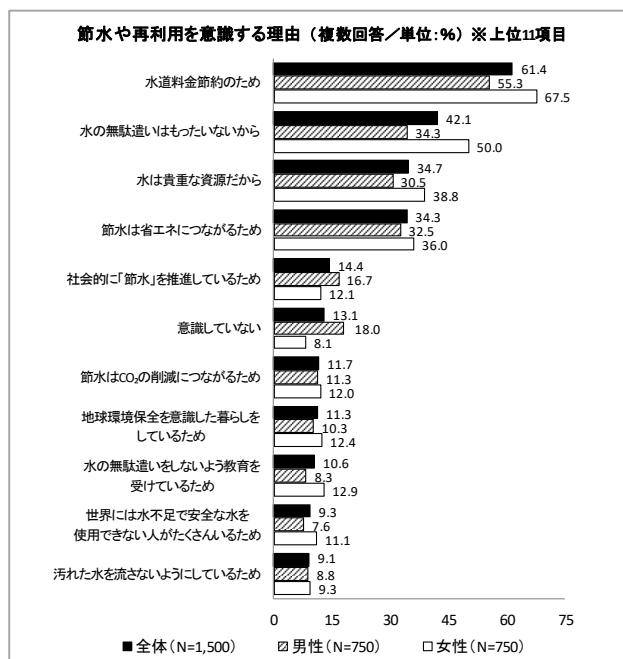
Q. 節水や再利用を意識する理由は？ (13択+その他+意識していない)

◇ 節水する理由は“環境配慮”より“節約”？

全体の6割超、女性の約7割が「節約のため」と回答。

本調査における節水意識の低下傾向を受け、今回新たに節水や再利用を意識する理由について調査したところ、1位「水道料金節約のため」(61.4%)が6割超で、2位「水の無駄遣いはもったいないから」(42.1%)を大きく引き離しました。一方、環境への配慮に関連する項目は、「節水は省エネにつながるため」(34.3%)が全体の4位だったものの、「CO₂の削減につながるため」(11.7%・7位)、「環境保全を意識した暮らしをしているため」(11.3%・8位)、「汚れた水を流さないため」(9.1%・11位)などは1割前後の回答に留まり、「環境配慮」よりは「節約」のために節水を意識する傾向が明らかになりました。

男女別では、男性は女性より「節約のため」(男性55.3%、女性67.5%)で12.2ポイント、「もったいないから」(男性34.3%、女性50.0%)で15.7ポイントと、それぞれ大きく下回り、「意識していない」(男性18.0%、女性8.1%)では10ポイント近く上回るなどの差異がありました。



沖大幹先生による解説 ～Okī's View～ ②

【節水・再利用の理由】

水道料金ってそんなに高いだろうか？水道を使うとそれを流す下水道の分も一緒に徴収されて、1人1日200Lなら1人1日約50円。風呂や洗濯を毎日ではなく隔日にしたり、トイレを毎回流さないようにしたりすれば半減も可能かもしれないが、歯を磨く際に蛇口全開で流す時間を朝夕30秒ずつ短くしても節水できるのは1日約10L、2～3円相当に過ぎない。それでも、水道料金節約のため、と答えた方が6割を超え、特に女性は全体の2/3の方がそう答えている。ただし、「もったいない」も女性で半数、男性でも1/3いらして、「貴重な資源だから」や「省エネにつながるから」も1/3を超えている。

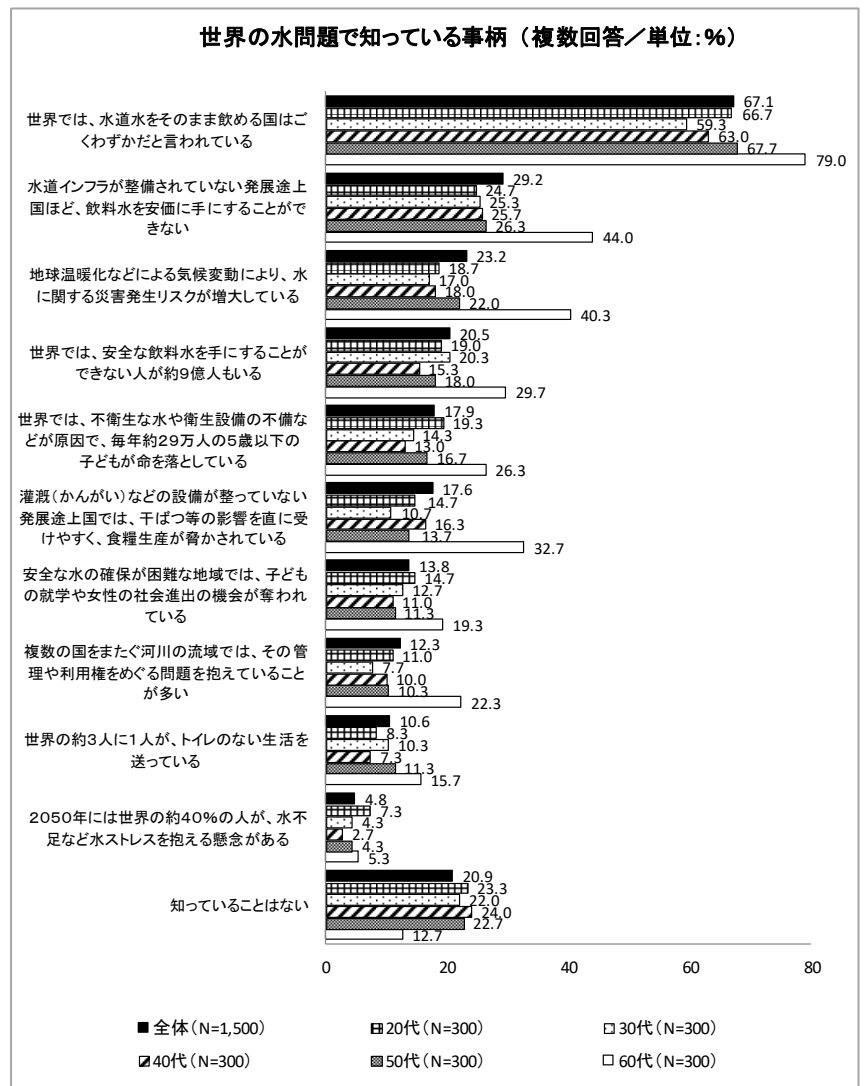
1Lの水道使用が約0.2gのCO₂排出に相当するので水の使用を通じて40gのCO₂を毎日我々は排出している。下水道処理場での浄化や汚泥の処理、生成されるメタンなども含めて考えると上下水道を通じた温室効果ガスの排出量はCO₂換算で100gにもなる。といっても、家庭部門の1人あたりの排出量は1日あたり約5.6kgなので、全体からすると1.8%程度であり、省エネとしては家庭での電気(排出量の約半分)やガソリン(約2割)の使用量を減らす方が大きな省エネが見込めるが、節水は節電や省エネ運転に比べると取り組みやすいのかもしれない。ちなみに、「節水は省エネにつながるため」と答えた方が全体の1/3であったのに対して「節水はCO₂の削減につながるため」と答えた方は全体の1/9程度であった。「CO₂排出量の削減」と聞けば違ったのかもしれないが、両者が結びついていない様にも受け止められる。また、「社会的に『節水』を推進しているため」といういわゆる「意識高い系」の方々が男性で17%、女性で12%いらして、主要な理由の中ではこれだけ男性の方が多いのが面白い。

いずれにせよ、我々は「環境のため」「社会のため」ではなかなか行動にまで結びつかないようだ。今後さらに気候変動対策やSDGsの達成に向けて日本社会を前進させるためには、わざわざ意識せずともいつのまにか環境や社会のためになる行動をしてしまうような仕組みにするか、経済的な動機付けが必要なのだろう。

Q.世界の水問題で知っていることは？（10択+知っていることはない）

◇「水道水をそのまま飲める国はごくわずか」が約7割も、飲めない国の実態などの認知は3割満たず

水と衛生をはじめ、貧困、教育、産業、気候変動などSDGsの各開発目標にもつながるとされる世界の水問題について、予め項目を提示した上で、知っている事柄を選んでもらったところ、「水道水をそのまま飲める国はごくわずかと言われていて」（67.1%）には約7割の回答があったものの、「水道インフラが整備されていない発展途上国ほど飲料水を安価に手にすることができない」（29.2%）、「安全な飲料水を手にすることができない人が約9億人もいる」（20.5%）、「不衛生な水や衛生設備の不備などにより、毎年約29万人の5歳以下の子どもが命を落としている」（17.9%）、「安全な水の確保が困難な地域では、子どもの就学や女性の社会進出の機会が奪われている」（13.8%）、「世界の約3人に1人がトイレのない生活を送っている」（10.6%）など、安全な水や衛生設備にアクセスできない地域の実態などを具体的に示した項目については、いずれも3割に満たず、その中の多くが2割にも達しませんでした。SDGsの達成に向けては、現在、日本においても国や企業などによる積極的な取り組みが行われていますが、今回の結果を踏まえると、一般生活者における関心度は、今ひとつと言えるかもしれません。



沖大幹先生による解説 ～Okī's View～ ③

【世界の水問題の認知】

世界の水問題はどこか遠い国の話だと思われているのか、「水道水をそのまま飲める国はごくわずか」以外の世界の水問題について「知っている」と答えた方は3割に満たなかった。もしかすると「9億人」や「29万人」などの具体的な数字には自信が持てずに「知っている」と回答しなかったかもしれないが、もう少し知っている方がいるかと思っていた。

どの選択肢についても男女差よりは世代間格差が大きく、60代以上がいずれも50代までを引き離して断トツの認知率であった。人生に余裕がないと世界に目を向ける余裕もないのか、あるいは海外旅行に行く機会が60代では相対的に多く、避けては通れない水の問題に多少の実感が持てるようになるからかもしれない。

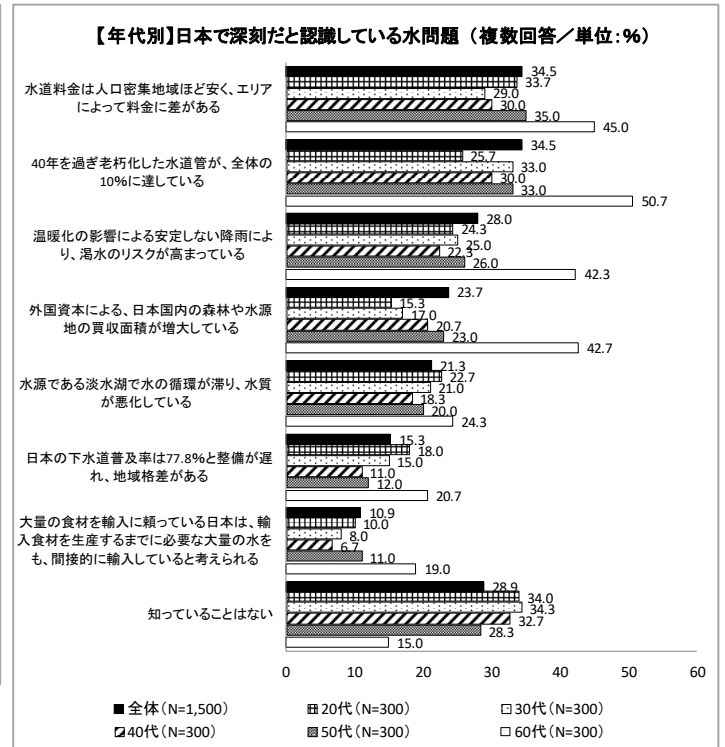
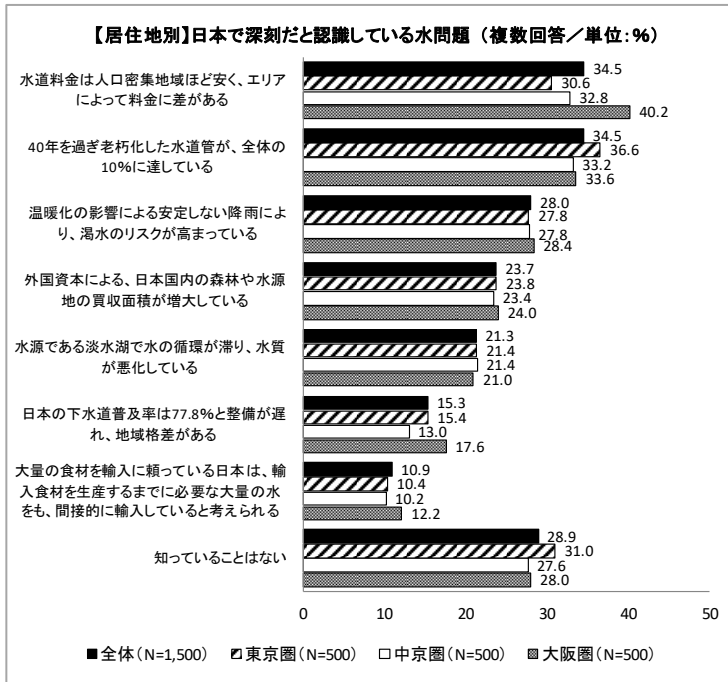
自分の身の回りにしか関心がないのは普段満たされた生活をしていたら仕方ないのかもしれないが、グローバル化した世界経済において、海外の水不足は早魃^{かんぼつ}を通じた食料価格の高騰や各国の社会不安を通じた紛争やテロに直結し、日本だけが安穏としていられるわけではない。また、日本でも少し前までは地域によっては水道の断水も頻繁に生じ、生活に不便をきたしていた。100年前には水と衛生施設が不十分なこともあって水系感染症が深刻な社会課題で、1歳になる前に5人に1人の乳児が亡くなっていた。高齢世代の世界の水問題認知が高いのは、実はそうした背景からの親近感によるのかもしれない。

Q.日本において深刻だと認識している水問題は？（7択+知っていることはない）

◇約3割の人が「知っていることはない」。大阪圏は「水道料金はエリアによって差がある」が4割超

次に、日本において深刻だと認識している水問題について、前述の世界の水問題と同様、予め項目を提示して聞いたところ、「水道料金はエリアによって差がある」と「40年を過ぎ老朽化した水道管が全体の10%に達している」が同率の34.5%で最も多く、次いで多かったのは「知っていることはない」（28.9%）で、全体の約3割を占め、日本における水問題についても、全体的に関心が低いことが分かりました。

なお、「水道料金はエリアによって差がある」は大阪圏では40.2%と、他のエリア（東京圏30.6%、中京圏32.8%）より高く、「老朽化した水道管が全体の10%に達している」や「外国資本による日本国内の森林や水源地の買収面積が増大している」は20代（25.7%、15.3%）と60代（50.7%、42.7%）でそれぞれ25ポイント以上の開きがあるなど、居住地や年代による差異が見られました。



沖大幹先生による解説 ～Oki's View～ ④

【日本において深刻な水問題の事柄】

選択肢を並べられても日本の水問題にはほとんど触れたことがない方が3割を超えている。一番認知度が高かったのは意外にも、というか、やはりまた、というべきか、水道料金格差であった。老朽化についての認知度もほぼ同じくらいなのは少しほっとするが、その対策には資金が必要だ、という点はどう認識されているのか非常に気になる。

なお、水道料金格差について大阪だけが突出して約4割の認知度となっているが、これは維新の会による行政改革の目玉のひとつが水道事業で、大阪府と大阪市の水道事業統合がずっと話題となっていた影響ではないかと推察される。

食料の輸入はその食料の生産に必要な水を輸入しているようなものだ、といういわゆる「仮想水輸入」を深刻な問題だと答えた方は全体で11%程度であった。この結果は、「仮想水」自体はご存知でも、だからといってそれが深刻な問題だともいえない、という判断が働いたからだと受け止めたいが、もしかすると「仮想水輸入」という概念自体がまだまだ知られていないのかもしれない。仮想水輸入自体は比較優位の法則に忠実に従っていて、それ自体良い悪い、あるいは問題だというわけではないが、自分たちの暮らしを支えている水の半分以上が実は世界の他の国に依存している、という事実は知っておいても良いだろう。

海外との関係という意味では、ひところ騒がれた外国資本による国内の森林買収であるが、平成18～28年の11年間で約1500ha足らずであり、日本の森林面積約2500万haに比べると1万分の1にも満たず、全体としては大きな問題ではない。もちろん、所有者不明も多い森林・山地の所有者の特定や土地取引に対して行政が関心を寄せ、それなりの取り組みがなされるようになったという意味では、深刻な問題だと多くの人が思った効果が表れているとも言える。

日本についても、世界と同様に、60代以上の認知度が断トツであった。

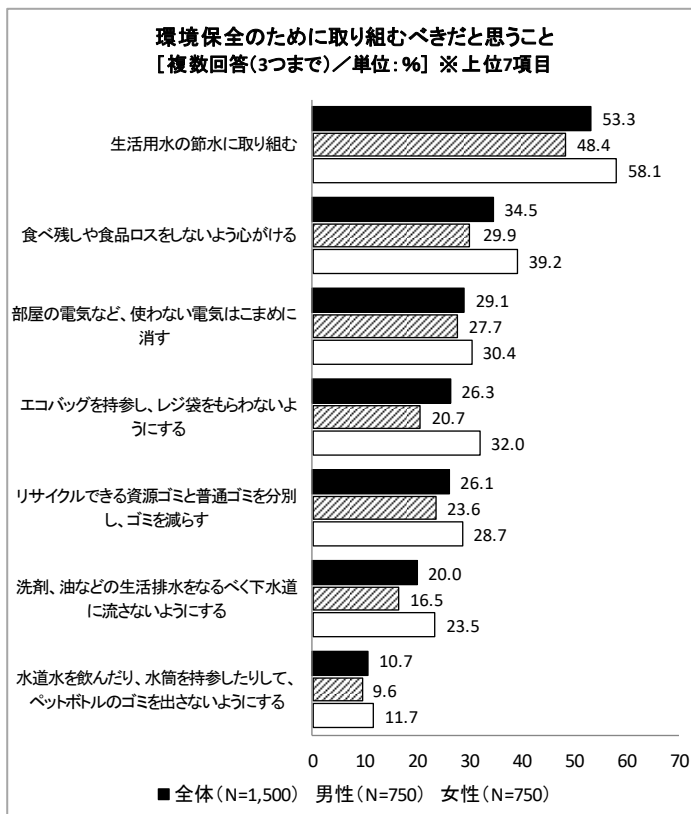
Q.環境保全のために取り組むべきだと思うことは？（11択＋思うことはない）

◇“無駄をなくす”取り組みが上位。

“汚さない”意識は低め

環境保全のために日常で取り組むべきだと思うことを、予め提示した項目の中から3つまで選んでもらったところ、1位「生活用水の節水に取り組む」（53.3%）、2位「食べ残しや食品ロスをしない」（34.5%）、3位「使わない電気はこまめに消す」（29.1%）となり、“無駄をなくす”ための取り組みが上位を占めたのに比べ、「洗剤、油などの生活排水を下水道に流さないようにする」は6位（20.0%）、「水道水を飲んだり、水筒を持参したりして、ペットボトルのゴミを出さないようにする」は7位（10.7%）と、排水を流さず、ゴミを出さない“汚さない”ことへの意識は低いことが分かりました。

また、「エコバッグを持参し、レジ袋をもらわないようにする」（男性20.7%、女性32.0%）の男女11.3ポイント差をはじめ、多くの項目で女性の方が高い数値となっており、性別による意識差も浮き彫りになりました。

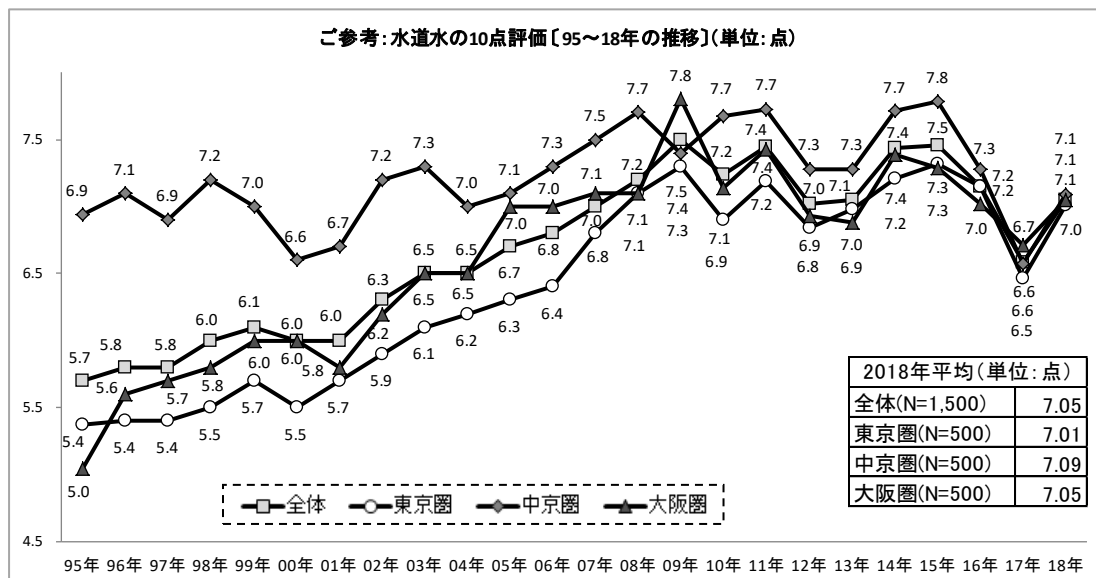


水道水に関する意識

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇平均が7点台を回復。10点満点回答率もアップ

水道水の評価は、昨年の調査で平均点が7点を大幅に割り込み、6点台半ばまで落ち込みました。今年の結果は、全体の平均が昨年から0.47ポイント増の7.05点、東京圏が0.55ポイント増の7.01点、中京圏が0.52ポイント増の7.09点、大阪圏が0.34ポイント増の7.05点と、いずれも7点台を回復しました。また、10点満点をつけた回答者の割合も昨年から3.7ポイント増加の12.6%。居住地別では東京圏が最も高く、昨年比5.0ポイント増の13.4%でした（中京圏11.6%、大阪圏12.8%）。



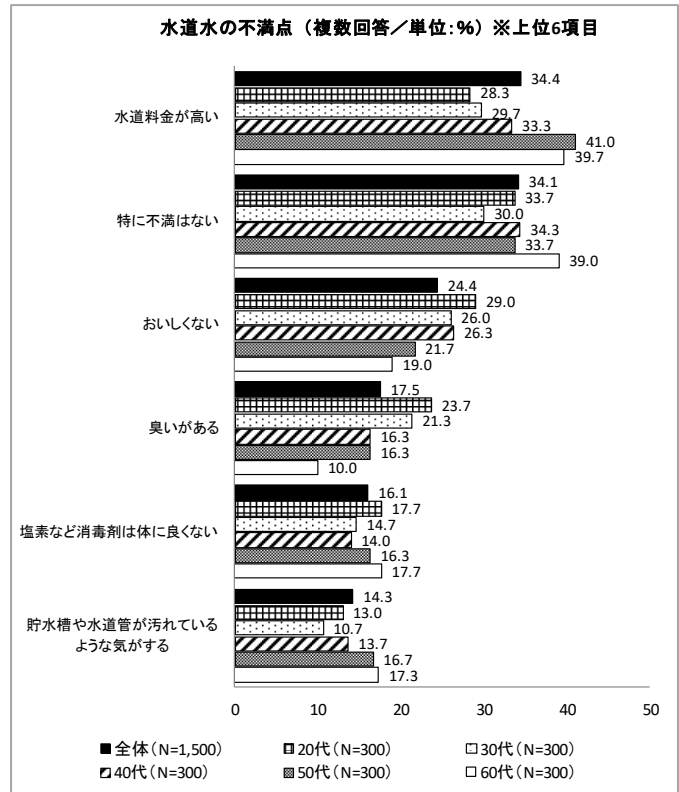
対象エリア：1995年…東京都、大阪府、愛知県、1996～2014年…東京圏(1都3県)、大阪圏(2府1県)、中京圏(3県)
有効回答数：1995～2009年…443～553、2010～2018年…1,500

Q.水道水について不満を感じていることは？ (8択+その他+特に不満はない)

◇「水道料金」が1位に。「不満なし」は減少

水道水の評価得点がアップした一方で、水道水への不満については、昨年から2.1ポイント増加した「水道料金が高い」(34.4%)が1位となり、「特に不満はない」(34.1%)は4.8ポイント減で2位に後退。次いで「おいしくない」(24.4%)が3位、「臭いがある」(17.5%)が4位でした。

年代別にみると、「水道料金が高い」は50代、60代の高い年代が多く回答した一方で、「おいしくない」は20代~40代、「臭いがある」は20代、30代と、低い年代の回答が多い傾向が見られました。



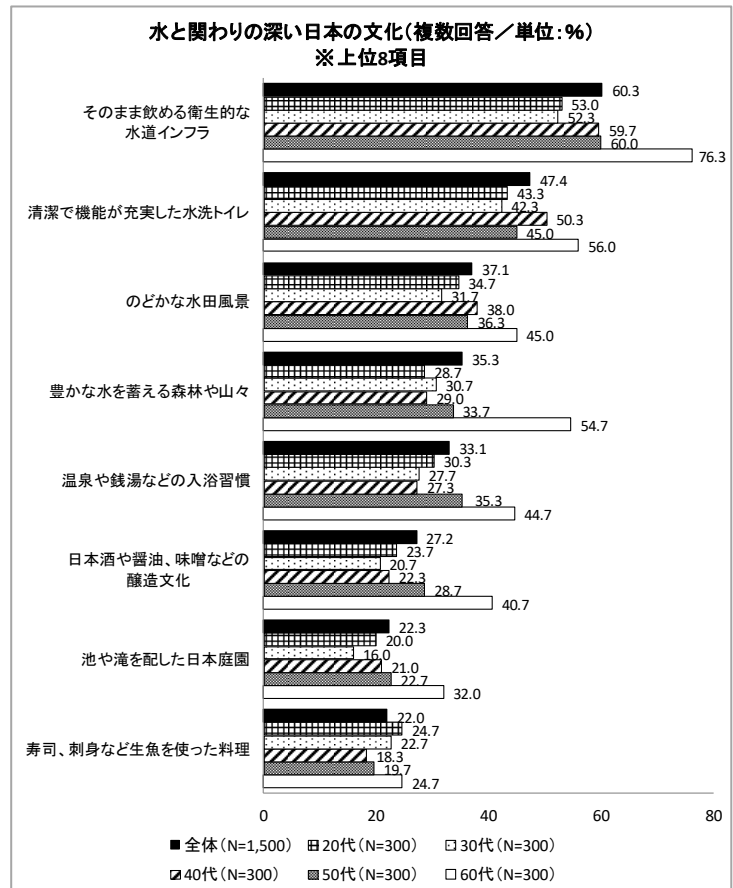
水と生活・文化

Q.水と関わりの深い日本の文化は？ (16択+その他+特になし)

◇「そのまま飲める水道インフラ」が4年連続1位。60代が特に高く、76.5%が回答

「そのまま飲める水道インフラ」が2015年の調査開始以降、4年連続の1位。昨年さらにポイントを上積み(4.2ポイント増)し、6割超(60.3%)の回答を得ました。

中でも、60代は76.3%と回答率が特に高く、次に高かった50代(60.0%)と16.3ポイント、一番低かった30代(52.3%)とは24.0ポイントと大きく上回り、全体の数値を押し上げる結果となりました。以下は、2位「清潔で機能が充実した水洗トイレ」(47.4%)、3位「のどかな水田風景」(37.1%)、4位「豊かな水を蓄える森林や山々」(35.3%)、5位「温泉や銭湯などの入浴習慣」(33.1%)となり、これらの項目も、60代の数値が高い傾向にありました。

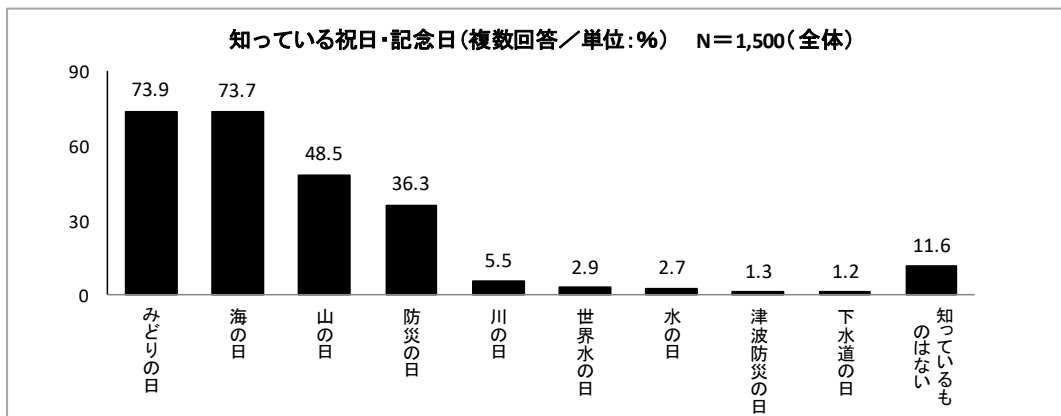


Q.知っている祝日・記念日は？（9択+知っているものはない）

◇「水の日」の認知上がらず2.7%

今回、水や自然にかかわる祝日・記念日の認知について2016年以來の調査を実施しました。

その結果、認知率の高かった上位3項目は「みどりの日（5月4日）」（73.9%）、「海の日（7月第3月曜日）」（73.7%）、「山の日（8月11日）」（48.5%）と、すべて祝日でした。「山の日」の認知は、2016年の時点では36.7%でしたが、施行から3年目の今年は5割近くまでアップしました。祝日ではない記念日では、「防災の日（9月1日）」が36.3%で唯一の2桁認知率だったものの、前回（46.7%）から10.4ポイント減少しました。その他は「水の日（8月1日）」（2.7%）をはじめ、いずれも1桁台でした。毎年「水の日」にあわせて「水にかかわる生活意識調査」（本資料）をリリースしている当センターとしては、この結果を真摯に受け止め、これまで以上に水文化の普及・啓発に取り組んでまいりたいと考えています。



沖大幹先生プロフィール

沖 大幹（おき たいかん）

東京大学国際高等研究所・サステイナビリティ学連携研究機構教授
「ミツカン水の文化センター」アドバイザー

1964年東京生まれ。1993年博士（工学、東京大学）、1994年気象予報士。1989年東京大学助手、1995年同講師等を経て2006年より同教授。2016年より国連大学上級副学長、国際連合事務次長補を兼務。専門は水文学（すいもんがく）で、地球規模の水循環と世界の水資源に関する研究。書籍に『水の未来』（岩波新書、2016年）、『水危機 ほんとうの話』（新潮選書、2012年）など。生態学琵琶湖賞、日経地球環境技術賞、日本学士院学術奨励賞など表彰多数。水文学部門で日本人初のアメリカ地球物理学連合（AGU）フェロー（2014年）。



「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

ミツカングループは1804年（文化元年）の創業以来、食酢の醸造を社業の中心としてきました。食酢の醸造に水は欠かせないものであり、ミツカングループは水の恩恵を受け、水によって育てられてきたといっても過言ではありません。それだけに、ミツカングループの水に対する関心は創業当時から一貫して高いものがありました。

1999年1月に、「水の文化」に関するさまざまな研究や情報交流活動を推進していく母体として「ミツカン水の文化センター」を設立し、今年で20年目を迎えました。センターでは研究活動、機関誌「水の文化」の年3回の発行、ホームページでの情報提供、市民参加型イベント「発見！水の文化」の実施など、様々な活動を行っています。

「水にかかわる生活意識調査」も「ミツカン水の文化センター」の活動の一環として実施しているもので、研究事業や、一般生活者の啓発活動の基礎資料として有効活用頂くことを目的としています。